

がんばれ！  
北海道

開拓の群像特集

合田 一道



歴史から見えるもの ②⑥

篠路を開いた先覚者

荒井金助と早山清太郎

幕吏の荒井金助が箱館奉公支配並として江戸から箱館へやって来たのは安政四年（一八五七）春、いまから百五十年前のこと



荒井金助像＝石狩市弁天公園

です。金助は着任するなり、石狩役所調役を命じられます。石狩は日本海側と太平洋側を結ぶ要衝の地で、好漁場である石狩川を擁していました。

この時期、わが国はロシアと樺太領を巡って対立しており、北辺を固める上からも、急ぎ開拓民を蝦夷地へ送り込まねばならなかったのです。

翌安政五年、金助は役所の改革に乗り出し、場所請負人制度を廃止して漁場を開放し、直場処話合に役人を配置し、自由出願にして産物を取り扱わせました。また発寒、星置、小樽、張碓などに「在住」入植させ、開墾を始めました。「在住」とはふだんは開墾の仕事をしますが、紛争が起きると武器を持って戦う集団で、後の

屯田兵組織によく似た制度です。

金助が開いた村は、篠路（現在の札幌市東区篠路）と望来（同石狩市厚田望来）の二村でした。金助は開拓地に寺院を建てて心の安寧を図るかわら、教育所を設けて子弟の教育に努めました。人々は「荒井村」と呼び、親しみました。

そんな折り、琴似（札幌市西区琴似）に入植していた早山清太郎は、水田を作り、収穫した玄米七合を箱館奉行に献上したのです。こんな早い時期に米が採れたとは驚きです。金助は箱館奉行の褒章を手渡し、励ましました。清太郎は感激し、金助を慕って家族を連れて篠路に移り、以後、篠路の開墾に努めたのです。

この時期に札幌村（元村、札幌市東区）に入植したのが、大友堀（後の創成川）を堀削し、用水を引いた大友亀太郎です。こうして金助、亀太郎、清太郎らによる開墾は急ピッチで進んでいったのです。

慶応二年（一八九九）春、金助は箱館奉行所に転勤になり、石狩を離れますが、無理がたたってか体調を崩してしまいます。療養のため室蘭に転地になりますが、奉行に呼ばれて箱館に赴いた時、熱病に罹り、しかも病床中に姿が見えなくなってしまう。そして十日余り後に、五稜郭の壕から遺体となつて発見されたのです。自殺説から他殺説まで出ましたが、原因はついにわからず、哀れな最期でした。

幕府が崩れて明治新政府になり、亀太郎はこの地を去りますが、清太郎は開拓使の使掌になり、開拓判官島義勇に重用され、神社地の選定、開墾地の選定、道路の建設、新川の造成などの先頭に立つて働きました。義勇は清太郎を指して「蓋（けだ）シ早山ハ傍近ノ山川ヲ熟知スル者、

即チワガ北道ノ主人ナリ」と絶賛しました。

義勇はその後、開拓長官東久世通禧の逆鱗に触れて、この地を去ります。清太郎は明治四年（一八七二）、篠路村の名主になり、教育所を建設し、札幌―篠路間、篠路―茨戸間の道路を自費で開削したり、茨戸新川、篠路川の堀削、拡張などを行い、人々から喜ばれました。

清太郎はその後も道路開削に精を出し、「道路を二十五本開削することにより神仏の加護がある」と主張し、ついに二十五本の道路を開いたといえます。凄い信念を感じます。

篠路の龍雲寺の境内に荒井金助と早山清太郎の墓が並んで建っています。地下の二人は、何を話し合っているのでしょうか。聞いてみたい気がしますね。



荒井金助と早山清太郎の墓＝龍雲寺

◆プロフィール◆

昭和九年（一九三四）、空知郡上砂川町生まれ。北海道新聞に入社し、道内各地を回る。在職中からノンフィクション作品を発表。『定山坊行方不明の謎』で北海道ノンフィクション大賞を受賞。退職後は札幌大学文化学部講師。著書は『日本史の現場検証』『人間登場』北の歴史を彩る『大君の刀』など。